

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

(2017 年度第 1 回研究会)

日時：2017 年 7 月 2 日（日） 13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディア会議室（304 室）

概要報告

2017 年度第 1 回の例会として開催された本会では、共同研究員および外部講師による 2 題の研究が報告された。各研究報告に対し、隣接領域の専門家からのコメントがあり、そのうえで全体討論をおこなった。最後にプロジェクトの成果論集についての話し合いをおこなった。参加者は 15 名であった。

(1) 吉野晃（AA 研共同研究員、東京学芸大学）

「タイ北部ミエンの歌謡テキストと歌謡言語」

タイ北部のミエン（ヤオ）のミエン語には、ミエン口語のほか、語彙発音の異なる儀礼言語と歌謡言語がある。ミエンの「歌」は専ら歌謡言語で唱われ、4 種の詠唱法が確認される。また女性シャマンの儀礼参入においても特定の詠唱法による「歌」が活用されている。2 曲の歌詞および 2 冊の辞典から歌謡語彙（約一千項目）を分析したところ、大半は漢語起源であるが、一部の歌詞にミエン語固有の歌謡語彙や口語語彙も混じることが判明した。歌詞の構成自体、きわめて複雑であることが示された。

(2) 梶丸岳（京都大学）

「吉野報告に対するコメント」

吉野氏の報告に対しては、前年度の例会にて貴州省プイ族の山歌の報告をおこなった梶丸岳氏より、比較対照の見地からコメントがあった。ミエンの歌謡スタイルとその状況は、その複雑さが特徴であり、きわめて興味深い。しかし、それ故に事態を整理して理解することが困難である。おそらく今回発表された事例をよりわかりやすく整理するには、メタ語用論的枠組みを応用しつつ、歌の置かれたコンテクス

トと歌の表現の諸側面の関係性を考察していくことが必要になると思われる。本発表の事例のような複雑で新しい状況をどこまで分析できるかは、理論的枠組みの可能性を探る試金石にもなるだろう。こうした理論と事例を往復することで、ミエンがいかにして時代のなかで生きているのかも明らかになるはずである。

(3) 川野明正 (AA 研共同研究員、明治大学)、菅野賢治 (東京理科大学)

「蕭傑一著『茨中天主教簡史』と雲南西北部のカトリック布教史」

雲南西北部徳欽県の茨中天主堂と、パリミッション・シトー会の布教史を記した現地唯一の生存者である蕭傑一氏の『茨中天主教簡史』の漢語・日本語・フランス語の整理・分析作業について、報告がおこなわれた。川野氏は、背景となる雲南西北部のカトリック布教史の概要を報告した。菅野氏は、蕭傑一氏と出会い、『茨中天主教簡史』の原稿を得るまでの過程と、現地布教史の背景となる、パリ外国宣教会のアジア布教史の概要を報告した。

本報告に対しては、カトリック宣教におけるチベット宣教の社会的背景や、蕭傑一氏が布教史をテキスト化した事情などについて質疑応答がおこなわれた。『茨中天主教簡史』が雲南省西北部のキリスト教布教を知るための貴重な資料であることを踏まえ、本プロジェクトの成果物として出版を目指すことが確認された。

(4) 「全体討論」

代表者の山田より、計画プロジェクトの研究成果の公開についての計画が示された。今年度はプロジェクト出版物として4冊が申請済み、これから4冊が申請予定である。また10月に香港で開催される国際学会において、本プロジェクトの分科会が採択されており、共同研究員の4名が参加する。そのほか、3年間の成果として論文集の刊行が予定されている。投稿希望の15件の内容が確認され、論集の構成や形態などについて話し合われた。

次回例会は11月から12月に開催することとした。

(文責：山田敦士)